+博論書式 3(論博書式 3)

平成 30 年 1 月 4 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	言語聴覚分野
学籍番号	15S3057	院生氏名	福井恵子
通学キャンパス	大川キャンパス		
論　文　題　目	パーキンソン病における社会的認知 －表情認知と共感性からの検討－		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

1. 研究の概要

1) 目的:本研究の目的は、パーキンソン病(Parkinson's disease: PD)における社会的認知機能を表情認知と共感性の観点から検討することである。

2) 研究Ⅰ: パーキンソン病における表情認知の検討

①目的:PD における表情認知について、感度と識別力の観点からその特性を検討する。

②方法:対象は PD 患者 17 名と健常高齢者 16 名。中性表情課題とモーフィング表情課題を実施した。

③結果・考察:PD では嫌悪と恐怖の表情認知の感度と識別力の低下を認めた。PD では恐怖と嫌悪について典型的な表情の識別が低下するだけでなく、小さな変化への感知力が低下すると考えられた。

3) 研究Ⅱ: パーキンソン病における表情認知と共感性の関連性に関する検討

①目的:PD における他者への共感性について検討し、表情認知と共感性の関連性を明らかにする。

②方法:対象は研究Ⅰの対象者のうち 14 名。共感性を多次元共感性尺度 Multi-dimensional empathy scale (MES)を用いて評価した。

③結果・考察:PD では MES の 4 領域の得点(共感性配慮、想像性、個人的苦痛、被影響性)に低下が認められた。MES における共感的配慮および視点取得の得点と表情認知の感度得点の間に相関を認めた。ただし、共感性には様々な要因が関係する可能性があり、さらなる検討が必要である。

4) 結論:PD 患者では、嫌悪と恐怖の表情を感知する機能、および共感性が低下する。また、表情認知の感度と共感性尺度の得点は関連性をもつ。

2. 研究方法、論証、論文形式

研究方法は倫理的に問題ない。論理性、形式とも適切である。

3. 知見の新規性と価値

本研究の新規性は、モーフィング画像を用いて PD 患者において恐怖と嫌悪の表情認知の感度が低下することを示した点、加えて共感性の低下を示唆した点にある。PD の臨床に貢献する研究として高く評価できる。

4. 審査経過・口頭試問

審査会は 2 回開催し、初回審査で論文審査と口頭発表を実施し、論文修正を求めたところ適切に修正された。口頭試問においては適切な応答がなされた。

5. 合否

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(言語聴覚学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主 査　阿部 晶子 副 査　鹿島 晴雄 副 査　原口 健三